

【書評】

José Luís Cardoso and Michalis Psalidopoulos, eds., *The German Historical School and European Economic Thought*

London and New York: Routledge, 2016, xxx + 241 pp.

ドイツ歴史学派（GHS）の欧州 12 カ国への影響を、各執筆者が自国の事情に関連させて分析した論稿に編者の序論と Hagemann の結びが付された書である。近年は GHS 自体を否定する議論が HOPE や ESHET 誌に掲載された。代表格は H. Pearson だ。序論は E. Grimmer-Solem & R. Romani, H. H. Nau らの議論にも触れる。それも考慮してあらかじめ一言。人は限定合理性のゆえに慣習と規則を頼る。行為とこれら制度は相互に形作り合うので、制度は重要だ。経済的行為は普遍的に功利主義的効用極大化となるというよりは経路依存的で、説明には歴史的接近が適しており、広義の制度理解が必要となる。

経済的普遍法則の否定は G に限らず、古典派も考察の素材を歴史に求めるから H は党派性でなく、共通の研究プログラムは無いので S と呼べぬ、として GHS の存在が否定される。Pearson らは代わりに歴史的 / 制度的 / 比較的経済学等の語を提案した。編者はそれを承知しつつも GHS を古典派の代替とした史実を重視し、諸国での長期に及ぶ影響が顧みられなかったと断じ、また新興諸国が国民経済形成に役立つ理論と政策論を求めてドイツをモデル視し共感したことに言及する。GHS は古典派を克服した新しい経済学と受けとられた。将来展望に際し、産業発展を進化過程と捉えるシュモラーや、保護政策・国家活動を擁護する社会政策学会と講壇社会主義者、労資対立・階級闘争の回避をめざす英国の社会改良主義者は味方で、マルクスに到るリカードウの労働価値論やミルの定常状態論は敵になる。各章（執筆者）を一口紹介

する。

第 1 章オーストリア (Chaloupek)。ベーム-バヴェルクやフィリポヴィッチらの支援でウィーン大教授となった「講壇マルクス主義者」C. Grünberg は経験的妥当性を重視した。彼の功績は弟子（レンナー、パウアー夫妻、ヒルファディンク、アドラー親子等）の育成だ。学位論文の多くは歴史学派の精神で書かれた経済史で、工業化促進策の支持、国内統一市場整備やギルド廃止を説いた。のち学史家として知られる K. Příbram もその一人。第 2 章のフランス (Potier) は GHS の影響がない国とされたが、早期のリスト受容に始まる保護主義指向や、デュルケームに象徴される社会学での影響は無視できない。ドイツ留学の社会学者が回路だった。第 3 章ベルギー (Erreygers & v. Dijck) に登場するピレンヌはシュモラーの経済史に魅せられドイツ歴史学会に属した。ビューヒャー『国民経済の成立』仏訳の序文も書いたが、史家として経済学者と一線を画した。第 4 章オランダ (Tieben & Schoorl) は、学派 / 世代 / リベラル・社会主義の対立が背景の物語構成。N. G. Pierson と HS 側の A. Kuyper 二人の後の首相が登場する。主役は経済計算論争にも現れる Pierson で、国内の論敵には古典派の成果の軽視、労働組合への肩入れ、経済法則の存在の否定を批判し、GHS には倫理的契機の重視や国民の有機的一体性の認識、有力者の経済史研究を評価した。1878-79 年には独逸より前に高水準の方法論争を国内で行なった。

第 5 章イタリア (Gioia) は、パレートが旧 GHS やシュモラーたちの議論が時代的課

題への「リベラルな反応」だとされていたことを黙殺し、国内の GHS 追随者を反リベラルで社会主義の徒とした、と記す。第 6 章スペイン (Astigarraga & Zabalza) の F. de Lemus (1876-1941) はドイツ留学で新 GHS やゾンバルトから多くを学ぶと同時に新古典派、とくにマーシャルを学び、帰国後教師として財務省勤務後も教育活動を内乱勃発まで続けた。新古典派、新 GHS、そして内戦後ケインズ革命に倣う新たな手法をとる若手の 3 グループの弟子があり、さしずめ福田徳三を思わせる。第 7 章ポルトガル (Almodovar & Cardoso) を評者は、いわば個別諸要素の混在が通例で方法の次元でも折衷が有力となるという、GHS 受容の一般的パタンの認識根拠としてこの国を描いたもの、と読んだ。第 8 章ギリシア (Psalidopoulos & Stassinopoulos) ではドイツ留学のピークと GHS の強い影響力が戦間期で、20 年代に経済学者需要が高まり留学生も増えた。首相経験者 A. Papanastasiou (1876-1936) は 1908-10 年にヴァグナーとシュモラーに学んだ社会民主主義者で、歴史的視点を重視し、変化のパターンをふまえた適切な政策で国民性を考慮する必要性を説いた。また経済効率より政治的に正しく社会的に善なるものが重要で、政策定式化には倫理的観点を考慮すべし、より平等な所得再分配は近代民主制の暴力的転覆を避ける唯一の方法だと唱えた。理論と歴史の結合を重視する A. Andréadès が 1893 年デフォルトの原因を財政運営のひどさに見たとの紹介もある。第 9 章トルコ (Özveren) の帝政崩壊期に活躍した Ziya Gökalp (1876-1924) は、世代の新旧、帝国と共和制、イスタンブールとアンカラ、戦争の 1910 年代と曖昧な 20 年代という多面的移行を体現した。新時代の象徴はアンカラの雑誌 *Kardo* (1932-35) グループの 5 人で、2 人がモスクワ、2 人がドイツ留学経験、背景に非合法マルクス主義があっ

た。30 年代ドイツの動向を注視し、ゾンバルト『資本主義の将来』を評価してタート派ツェーラーへのインタビューを載せるなどドイツ熱は高いが、ヒトラー政権を批判した。雑誌の勢いはイスタンブール大学の停滞と表裏関係だった。

第 10 章スウェーデン (Carlson) はヴィクセルとカッセルを含む 8 人のドイツ留学者を紹介する。遅れた工業化の促進には適さぬ古典派の代替物として GHS が登場した。1890 年代以降は新古典派が有力だが、政策分野では GHS・講壇社会主義の影響力が第一次大戦まで続いた。第 11 章ロシア (Avtonomov & Gloveli) は、GHS が比較研究を刺激しロシアの構造・制度的特質の検出作業に寄与し、段階論は資本主義発展に関わる政治論争に大きな役割を演じた、と指摘する。学術研究の政治的含意をリアルに実感させる。第 12 章ブルガリア (Nenovsky & Penchev) の世紀転換期の経験は、GHS の思想が自由主義や新古典派の教義のいくつかと両立可能で、折衷的モデルが意識的に構築されたことを示す。本章に登場する Kinkel の壮大な経済発展論 (1921) を別稿で論じた Nenovsky は、その独特な思想と洞察がシュモラーの研究プログラムの枠内にある (*The European Journal of the History of Economic Thought*, 22(2): 273, 299) とした。評者には、ソ連圏崩壊のような体制的現象を説明する理論がない (Nenovsky, 本誌 52(2): 1) なかでの、GHS に発する総合的社会科学の可能性の模索と見えた。

経済学の国際化は一時「経験的な実在との関わりではなく、公理系や仮定相互の無矛盾性」(荒川, 本誌 49(1): 167) 重視一色の様相を呈したが、歴史・統計研究など誤りの危険を孕む帰納法をも稼働して経済学を経験科学とする営為が国際的広がりをみせた事例提示として本書を受けとめたい。

(小林 純: 放送大学非常勤)